三色パン

戸木田　宗次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三色パン

【Nコード】
N7358Y

【作者名】
戸木田　宗次郎

【あらすじ】
この町は動物と植物にだけ優しくて、人間には冷たい。
同じ学校の生徒が行方不明になっても

同じ学校の男子生徒数十名が一日で命を落としたとしても

同じ学校の一生徒が何十回入退院を繰り返したとしても

町民はみな、何とも思わない。

そんな疎外された名前の無いこの町に住む俺たち弟塚（ていづか）家の3兄弟と

俺たち兄弟がそれぞれ想いを寄せる君ヶ主（きみがあるじ）家の3姉妹。

三者三様、三色パンのような俺たちと彼女たちの恋の物語は、

きっと絶対確実にうまくいかないだろう。

だってすべての出来事の戦犯は、言うまでもなく君ヶ主家3姉妹なのだか・・・

1色目　『輝きを失わない女』

プロローグ

この町に名前は無い。恐らく地球のどこかに存在しているはずなのだが、

あまりそういったことはみなどうでもよく、誰も気にしていなかった。

この町は不思議だ。愛玩動物とそこら辺に咲いている草花には優しいが人間には一切優しさがないし、

優しくする気も無い。極端に言えば興味を抱かないのだ。

そんな人間が人間を放任しているこの町で、俺たち弟塚（ていづか）３兄弟は今、

それぞれの恋愛成就のために日々奮闘していた。

1色目

『輝きを失わない女　1』

「また事故ったんだってな、文ちゃん」

みそ汁を啜る弟の声に、俺はご飯をよそっていた手を止める。

「・・・また？」

確認すると、漬物を箸でつまみながら弟は頷く。

俺が机に置いた茶碗を掴み取り、白米を口に入れながら弟は話を続けた。

「また」

「今度は俺の嫁さんグループが3年の男子をしめてた時に、偶然たまたま

現場の目の前にある道を歩いていて、3年男子が最期の力を振り絞って投げつけた

釘付きバッドが嫁さんグループの間をすり抜けて、目の前の道で靴紐を直して

立ち上がって振り向いた文ちゃんの額に激突。すぐに救急車で運ばれたから

命に別状は無かったらしいけど、病院が検査費をぼったくりたいからって

無理矢理1週間の入院命令。お陰で公兄ちゃんはま—たお見舞いの毎日ってわけだ」

「へぇ・・・」

毎度毎度凄い事故の遭い方をするな、我が主の姉君は。

「じゃあ俺もう行くな。嫁さん迎えに行かなきゃいけないし」

朝食を食べ終えた弟が席を立つ。時刻を見るともうすぐ8時になる。

俺も我が主のために絨毯を引かなければいけないので、仕方なく食事を中断して

食器を流しに放置したまま家を出た。

輝きを失わない女2

1色目　　　　　　　『輝きを失わない女　2』

わたしの左目はもう無い。

左目に出来た空洞の中に仕舞い込んだわたしのトラウマ。

今でも思い出す度に吐き気がする。

わたしの左目は抉られ、そして食された。あの女に、あの白くて実態が掴めない

エメラルドグリーンの化け物に・・・。

今日も相変わらずこの町は人間には無頓着だ。

望遠鏡を覗きながら辺りを見わたすと、ちょこちょこと地面に倒れている人間の姿。

だが誰も彼らに手を差し伸べようとしない。酷い時は倒れている人間の手を踏んでいく通行人もいた。

その数メートル先に野良猫の家族がいた。家族を囲む数人の老人たち。

手には煮干しやら猫の缶詰やらを持ち野良猫の家族に食事を提供し

ている。

その姿を見た通行人たちは優しい表情を浮かべながら野良猫家族の姿を携帯のカメラで撮ったり、

拝んだりしていた。

相変わらず気持ちの悪い町だ、この町は。

さてさて望遠鏡の位置を変えて、ターゲットにロックオン。

わたしも通っている名も無き高校。その玄関先に敷かれる長いレッドカーペット。

その上を歩く紅蓮のロングブーツを履いたあの女。

くくく・・・よもや自分が同じクラスのクラスメートに監視されているとは思ってもいまい。

「ねえ、こんなところで見てないで学校で直接話したら？」

妹がわたしのスカートを掴み引っ張る。どうやら監視作業が飽きて来たらしい。

「うるさい！今忙しいの！登校したきゃ、さっさと一人で登校しなさい」

「・・・元姉の意気地なし・・・」

妹の妙才はわたしにそう言うと、不貞腐れながら玄関へ向かって歩いていく。

靴を履き、鞄を手に持ち、ドアノブを回す寸前、妙才はわたしのほうを振り向くと、大きな声で叫んだ。

「元姉が話し掛けられないなら、私があの女に声を掛けてやるよ！」

振り返るわたし。ドアを開けて家を出て行こうとしている妹。

「ちょ・・・、ちょっと待ちなさいよ！！妙才」

叫ぶわたし。だが妹はわたしの声を無視して出て行った。久しぶりに腹から声を出したというのに・・・。

・・・なんということでしょう・・・！！！！

「あの馬鹿ぁ・・・」

怒りにまかせて望遠鏡を床に叩き付け、横に置いておいた鞄を握りしめながら妹を追いかけるために

久しぶりに走り出すわたし。

息が続くか凄く心配。

輝きを失わない女3

1色目　　　　『輝きを失わない女　3』

父は私たちをこの名も無い町に置いて行った。今日も父はどこかで女を口説いては、

また新しい姉妹を量産しているのであろうか。

・・・全く、男の性欲というのはどこまでも貪欲で浅はかなものなのだろう・・・。

「は・・・はーい！君ヶ主（きみがあるじ）さん。お元気？」

声を掛けてきたのは恐らくクラスメートだと思われる女。

左目にいつもアイパッチを付けている、どこか根暗っぽい雰囲気の・・・

えっと・・・・。

「失礼。私、あなたの名前を覚えていないの」

「・・・・」

引き攣っていた笑顔が更にヒクヒクと痙攣を起こしている。

病院へ行った方がいいんじゃないのかしら？気持ち悪いわよ？

「あ・・・あははは・・・。そ、そうだよね、名前名乗らなきゃね。

わたし、脇夏(わきな) 元譲。一応、あなたと同じクラスになるのはこれが3回目なんだけど・・・あははは・・・」

「そうだったの。知らなかった」

率直な意見を述べると脇夏さんの表情が固まった。固まったというか睨めつけられて

いるのかしら?

何か悪いこと言ったのかな、私。

「私、妹の妙才!」

脇夏さんの横から出てきたのは、明るい感じの脇夏さん。脇夏さん2としよう。

「・・・初めまして?」

「残念。私も元姉と同じでアンタと同じクラスになるのはこれが3回目」

「そうなの?全く気が付かなかった」

嫌、本当に気が付かなかったわ。姉妹揃って存在感がないのね。

「それで、何か御用なの？」

「・・・え・・・えっと・・・それは」

「私たち、アンタの妹に復讐してやるから！覚悟しなさい」

「ちょっ！妙才」

慌てる脇夏1と私に指を指す脇夏2。この女・・・私に指を指してやがって、

マジ気に入らねえ。

その手入れされてねぇ汚い指、折り曲げて貰いたいのか？

「お好きにどうぞ」

脇夏1と2から醸し出される辛気臭さに耐え切れず席を立つ。ゲロゲロ。

それに妹が何されようが知った事じゃないのに、何で話し掛けてきたのかしら。

「とても不思議議ね。子考」

そう言って振り返ると、私の隣に歩いていた子考がゆっくりと頷いた。

輝きを失わない女4

1色目　　　『輝きを失わない女　4』

我が主の横に並んで歩ける喜びと誇り、

これは何人にも理解できるものではないだろう。

俺と我が主、二人だけの中で確立されている価値観と共存関係。

誰も分からないだろう俺と我が主の絆は、いつまでも互いの溝を補い合っている。

「あら、君ヶ主さん。相変わらず味噌臭そうな髪形ね」

俺と我が主の前に立つ美しい女性。彼女の名前は寵愛（ちょうあい）本初。

この名前の無い町の中、限定の町内会アイドルだ。今日も背後に数十名の親衛隊を

引き連れている。

正直、俺は氏のどこに魅力があるのか全く分からない。

「ご町内アイドルの寵愛さん。さっさとギロッポンあたりでシャブセッ◯スキメて

豚箱にでも入ればいいのに」

対峙する名古屋巻きと盛り髪。

なぜそんなことをするのか俺にはさっぱり分からないが、この二人は顔を合わせては

互いの髪形について毎日罵り合っている。

「相変わらず言葉遣いも性格も恋人も全てにおいて品がないわね、君ヶ主さん」

そう言って寵愛氏は我が主と俺を交互に見た。

「子考は品のあるいい男よ？でも貴方のような親衛隊とか言うオタク共に囲まれて、

一生処女を演じきらなきゃいけない町内限定アイドルさんには

一生理解できないかしら。子考の良さが」

我が主の指先がそっと俺の指に触れる。とても暖かい気分だ。

だが寵愛氏はそんな俺と我が主の姿を冷めた目で見て、そして言い放った。

「理解などしたくないわ。あなたたちみたいな外道カップル」

「・・・」

我が主は口を瞑り、寵愛氏を見つめていた。
成程『外道カップル』と表現されてしまったか・・・。
さて、それでは我が主はなんと答えるのだろうか・・・。
「・・・人間は誰だって人道から外れることがあるわ。
それでも平然とした顔で生きていくものなのよ」
俺の指に我が主の指が絡みつき、互いの手を結び合う。あぁ我が主。
そのまま寵愛氏たちのど真ん中を通り抜ける俺と我が主。
寵愛氏はもう何も言ってこなかった。しかし不思議な人だ、寵愛氏。
だって氏はこの誰もが他人に興味を持たないこの町で、俺と同じ位に我が主の事を気にかけているのだから。
「子考・・・」
我が主の唇から紡がれた普段より熱を含んだ甘い声が俺の耳に侵入する。
「何ですか、我が主」
「今夜・・・」

―えぇ、では今夜。熱い夜を繰り広げましょう・・・。

愛しています、我が主。

輝きを失わない女5

1色目　　　　　　『輝きを失わない女　5』

わたしは常に先を行く。先手必勝。

「・・・ていうか、なんで隠れてんの元姉？」

ふふふ、まったく妙才はお馬鹿さんね。

「隠れているのでは無いの。これは待ち伏せよ！」

「はぁ？」

たくっ、このお馬鹿ちゃんは先を読めないんだから。

「これを見なさい」

「何それ」

「これはわたしが授業中に書いた偽ラブレター」

「へー・・・」

「へー・・・」って！！！馬鹿！トリビアじゃないのよ！馬鹿妙才

「よく聞きなさい。これは巧妙な罠。わたしが下校途中の君ヶ主次女と

顔面が２０代後半に見えるちょっとだけゴリマッチョなあの

甘々ゲロゲロカップルの前に登場。

そして顔をチークで赤くして、この手紙をちょいゴリマッチョに

『あ・・・あの・・・ずっと好きでした！私の気持ち、読んでください！』と言って渡す。

頬を赤めるちょいゴリマッチョと憤慨する君ヶ主次女！甘ゲロカップルの間に出来る

溝という名の隙。

その隙をわたしが突く！これで君ヶ主次女もお終いよ！」

「ねえ、それは次女じゃなくて三女に対してするべきことじゃないの？」

「・・・」

・・・何を言っているのかしら、この子。

「思うんだけど、次女を監視しても三女には何の攻撃にもならないよね」

聞こえない、聞こえない。

「なんで元姉ちゃんは次女ばっか見てるの？好きなの？」

「好きじゃないわよ！」

「じゃあなんで次女ばっか相手にしようとするの」

「・・・」

左目の空洞が蠢く。あの日の記憶が少しだけフラッシュバックしてきた。

高校1年生の時だった。

中学生で生意気なグループがいると聞いたわたしと仲間たちは、そのグループにケンカを吹っかけて、結果全滅。

わたしは最後の一人となっても手を休めることなく拳を相手に目掛けて打ち込んだ。

だが、アイツはわたしの一撃を鮮やかにかわすと、隙だらけのわたしの顔面目掛けて

腕を伸ばしてきた。その時は何が起きたのか全く理解できなかったけど、

すぐ理解する。

わたしの左にあったはずの眼球は抉られ、抜き出されていた。
叫び狂うわたしは、痛みに耐えきれず地面にひっくり返り殺虫剤を吹き掛けられた
虫の様にジタバタと足を動かし一生懸命藻掻く。
だが痛みが引くことは無く、さらに吐き気が襲ってきたため残された目のフィルターが
霞む。
だが地面に落とされた自分の眼球だけはハッキリと見えていた。
だからせめてそれだけは奪い返さなければいけない。
眼球を掴むため震えが止まらない腕を強引に伸ばす。わたしの左目は目の前にある。
誰にも渡さない。
爪の先っぽが眼球に触れる、その感触に安堵した。
それが失敗だった。
わたしの目の前にある、わたしが掴もうとした眼球を、エメラルドグリーンの爪を持った
細い指がひょいっと掴み上げ、そのまま落ちた眼球を口へ運び桃色の唇を大きく開き、

指を離して眼球を口の中へ落下。

ごくりと一飲みしたあの女は、とても満足そうな表情を浮かべている。

それを見ていたわたしは、まるで自分自身がその女に食べられてしまったような錯覚に陥り

耐え切れず嘔吐、そのまま気を失った。

「妙才、あの女はとてつもなくヤバイ奴なの。正面切って攻撃を仕掛けてもやられるのが

オチよ。

だから仇を取りたいのは山々だけど、まずは足元から崩すべきだと思う。

だからまずはあの次女を壊す！」

キリリとした表情でそう言うと、妙才は目を丸くしていた。

ふふふ驚いた？あなたの姉がいかに策略家なのか分かっていただけたかしら？

「要はタイマン張りたくないから、背後から襲うってことね」

「待って。なにかが違う気がするの！」

そんなこと言われたら、わたし卑怯者みたいじゃん！！

「っ・・・・は！」

こちらへ近づいてくる足音。右目でチラ見をしてみれば、歩いてきたのは

ちょいゴリマッチョの男。

来た来た来た来た来たぁああああああああああ！！

わたしは木の陰から飛び出して、ちょいゴリマッチョの目の前に立ちすかさずラブレター（偽）を

差し出す。

「ずっ・・・ずっとあなたが好きでしたぁ！！！これ読んでくださいー！！！」

予定より少し声が裏返ってしまったけど無問題。これで君ヶ主次女も終わったも同然。

ホホホホホ

『ビリ　ビリ　ビリ　ビリ』

・・・ん？

差し出した腕を伸ばしたまま顔を上げてみると、わたしの書いたラブレターが千切られて、
紙吹雪の様に宙に舞っていた。

「・・・・へ？・・・・」

どういうことなのかしら？
唖然とするわたし（と、恐らく妙才もびっくりしている筈）
しかもよく見れば、この男・・・君ヶ主次女の彼氏じゃ無い？！あ

れ？あれ？

「雲ちゃん、どうしたの」

わたしの目の前に立つよく見れば髭面の男の横から背後霊の様に出てきた細身の女。

地面に落ちていたわたしの書いた偽ラブレターの残骸を拾い上げる。

「な・・・何でもない！何でもないんだよ！！！」

妙に焦っている髭面のちょいゴリマッチョ。さてはこの背後霊女は彼女かしら。

—あらあら、これは、これは。何ていうかご愁傷さ・・・・・

「・・・・！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？」

有頂天だったわたしの心が徐々に下に向かって落下していく。

偽ラブレターを掴んでいる女の爪の色、その色を見た瞬間、わたしの胃から内容物が

逆流してきた。

「ひっ・・・・ひぎぃっ・・・・」

ガタガタと震えが止まらない両足。唇が真っ青に染まる。

目の前にいる女の爪の色は見間違えることのない、あの日と同じエメラルドグリーン。

そう、つまりこの目の前にいる女は・・・・。

「これってラブレタ・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！」

気が付けばわたしの足は校門へ向かって全速力で走っていた。

もう振り向くことも無いだろう。ていうか振り向けない。

「ちょ・・・ちょっと元姉！！！」

妙才の声がしたけど完全に無視。もうあの場に戻るなんて不可能。

わたしは吐きそうな口元を押さえながら全力疾走で走る。例え追いかけられることが無くても、

わたしは逃げる。あの女に関わるなんて死ぬのと一緒だ。

「ひゃっ！」

刹那、足元に転がっていた人間の遺体に足を引っ掛けて地面に転が

るわたし。

それと同時に吐き出されるわたしの内容物。でもここの人々はそんなことが起きても、

全くこちらに振り向こうともせず平然と歩いていた。

今日この時だけは、この町に住む人間の性質に感謝したいと思った。

輝きを失わない女6

1色目　　　　　　　　　『輝きを失わない女　6』

彼が私に性癖のことを教えてくれたのは付き合い始めて1か月くらいたった頃。

近くの喫茶店に呼び出されて告白された彼の性癖について私は何も驚かなかった。

うちには三女の例があるから、今さら何を言われても驚くことは無い。

なのに、彼は私に何度も何度も頭を下げた。

「軽蔑したならそれでもいい」「別れたいなら別れてもいい」「でも俺は君に嫌われても、

君のことをいつまでも愛しているから」・・・なんて、体格のいい彼がとても

小さな子供の様に見えたの。

まるで親に捨てられまいと必死で頑張っちゃう子供の様で、私の彼への愛はますます

濃くなっていった。

両手で彼の顔を包み込みながら、上を向けさせる。彼ったら目を丸

くしちゃって、可愛い。

・・・そして言ってあげたの、私はそんなこと気にしないって。

むしろあなたの力になってあげたい。

彼はまだ驚いていた。まあ、たしかに一般人がそんな話を聞いたら警察へ通報か、

猛ダッシュで逃げるかのどちらかだろうし。

でも安心して。私はあなたのことを変とは思わない。

だって特殊性癖を持った人間は人類であなた一人だけじゃないんだし、

気に病むことは無いのよ。

私の言葉に項垂れる彼。あぁ・・・なんて可愛い姿なの。

惚れ惚れしながら見ていたら彼は徐に私の手を顔から離して、うるんだ瞳でこう言った。

「君のことを・・・主って呼んでいいかな？」

は？何それ。漫画の読みすぎなんじゃ・・・。

「俺は・・・君の下で、君のために全てを尽くしたい」

・・・。『尽くす』という言葉に私の支配欲が反応した。

だってそうじゃない？こんな体格のいい、好みの男が私の下についてて私のために

何でもしたいなんて宣言されちゃったら・・・。うふふふ。

だから私も本音を彼にぶつけてあげた。

「人殺しってことは、その人間の命を奪うってことよね。それってつまり

強奪ってことでしょ？

・・・私、誰かの物を奪う行為ってとても甘美なことだと思うの」

子考が持ってきた武器（本日は日本刀）を持ち、家の中を歩き回る。

誰も彼もみな死んでいた。

殺したのは私。それを見つめる子考。

その目はギラギラと輝いていて、私も釣られて濡れそうになってしまったけど・・・

でも、ダメ。

まだまだ殺す相手が残っているんだから。制服を返り血に染めたまま家を出て行く私と子考。

玄関先では先に避難させていた犬と猫が仲良さそうにじゃれ合っていた。

ごめんなさいね、あなたたち。この家の人間はもう誰も生きてないし血生臭いから、

明日からはこの町の誰かに餌と暖かい寝床を貰って頂戴ね。

輝きを失わない女7

1色目　　　　　　　　　　『輝きを失わない女　7』

一人だけ残されるくらいなら、一家全員殺した方がいい。そのほうが幸せだ。

夜、我が主のご自宅へ向かうと既に我が主は外へ出ていた。

駆け足で近寄り家から持ってきた日本刀を渡すと、我が主は俺に向かって

微笑んでみせた。

「今日もいっぱい出してね、子考」

「・・・我が主がそうご所望ならば・・・」

俺の下半身はすでに熱を帯びていた。胸の高鳴りが収まらない。

俺たち3兄弟の両親は、死んでいる。互いの腹には包丁が突き刺さっていた。

誰が殺したのか、それとも自分たちで刺し合ったのか、真実は一生明かされることはない。

この町はそういう場所だ。人間がどんな形で命を落とそうが、その経緯や原因を

調べるものは誰一人いない。

みんな『いつの間にかどこかの誰かが居なくなっていた』という感覚しかなく、

同じ人間が死んだことに対する悲しみは持ち合わせてはいない。

だから誰も俺たちに手を差し伸べることは無かった。

懐かしいあの頃。

白米が底を付き、下手に金を使えなかった俺たちはスポーツ人間だった父が残した

プロテイン飲料をご飯にして飲み続け、自慰行為をしては腹が余計減ると長男が

言い出したため、ムラムラしたらみんなでストレッチやらランニングやら、

とにかく身体を動かして自慰行為を止めよう！と、みな必死で動き回っていた青春の日々。

お蔭で俺たち3兄弟はみな人より少し体格のいい

俗に言うところのチョイマッチョ（細マッチョ？）体型になってし

まった。

そのためか、

部活ではいつも柔道部やらラグビー部やらに誘いを受けたが如何せん俺たち3兄弟は

食事としてプロテイン飲料を飲んだ結果この体型になったわけで、力強さなどというものは

元から持ち合わせているわけがないので、毎度入部して1日目で

「・・・うん、なんかごめんな」

「あ、なんなら明日からは来なくていいから」

なんて言われることが多々有り、正直俺はこの体型にげんなりしていた。

そして追い打ちを掛ける俺の特殊性癖。

もうダメだ、自慰行為がうまく出来なくて『頭がフットーしそーだよー！！！』

なんてセリフを壁に向かって叫んでいたその時、俺は我が主と出会ったのだ。

我に返り辺りを見渡せば、そこには一家族全員分の遺体。俺が最も興奮する代物だ。

「・・・っ・・・」

興奮を抑えきれず下半身が暴れ出す。

解き放ちたい願望を抑え込みながら俺は学校で氏に言われた言葉を思い出していた。

『外道』とはよく分かっているではないか、寵愛氏。

そうだよ、俺は人間の遺体を見るのが大好きなんだ。

でも俺には人を鮮やかに捌くほどの力も度胸も無かった。そんな俺に手を差し伸べてくれたのが我が主。

俺を愛し、同じ外道の道を歩いてくれる唯一無人の俺だけの主。

「お待たせ、子考」

「我が主・・・」

我が主は俺の下半身に目を向ける。いつものことだが、いつも恥ずかしかった。

「ごめんね。でもあと1軒で終わりだから」

「・・・」

本当ならば、今すぐここで全てをブチかましたいがここは我慢しなければいけない。

今日のターゲットも前回同様、寵愛　本初氏の親衛隊・第9期メンバー。
(ちなみに第1~8は、既に我が主が処理済)

彼らを全員仕留めるまで、俺はこの欲望を解き放ってはいけない。

規約は無いが俺が出来る我が主への最大の敬意として、

いつもこれだけは守り抜いている。

正直つらいし、歩きたくないが・・・だが我が主のため。せめて顔と声だけは平然を

装わなければ。

「問題ありません。さあ、最後のメンバー宅へ向かいましょう」

「・・・ふふふ・・・そうね」

少しイタズラな笑みを浮かべる我が主。

そんなあなたの御茶目なところも大好きですよ。

星が光輝く夜空の下、手を繋いで二人で歩く。

俺と我が主の今日のデートはそろそろ終盤を迎えようとしている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7358y/

三色パン

2011年11月22日01時58分発行